オーズ&なのは　リリカル大戦2012

てつを

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オーズ＆ａｍｐ；なのは　リリカル大戦２０１２

【Ｎコード】
Ｎ４８５７Ｙ

【作者名】
てつを

【あらすじ】
ミッドチルダににやって来た映司とアンク。
蘇る謎のグリード。
魔法の世界を舞台にメダル争奪戦が幕を開ける。

プロローグ（前書き）

小説書くの初めてなので不安でいっぱいです。
更新もかなり遅めの予定です。

プロローグ

「…」
とある公園で一人の男がベンチに座りアイスキャンディーを食べている。
眼鏡をかけ、金髪と、顔だけなら優男に見えるがその髪型が合わさり異様な雰囲気を醸し出している。
「アンク！」
するとまた別の男が公園に入ってきた。
アンクと呼ばれた男はアイスを食べる手を止めてベンチから立ち上がる。
「どうだった？」
「ただのひったくり、どうってことなかったよ。」
彼の名は火野映司、とにかく困っている人は放っておけず今ひったくりからとられたものを持ち主に返してきたところだ。
ちなみにひったくりはバイクで逃げたが映司はそれに走って追いついた。
「少し見ない間に随分逞しくなったな。」
「先輩達にいろいろ教わったからね、ちょっと回り込めば簡単に追いつけたよ。」
アンクは再びアイスを食べようとするが、何かに気づき後ろに振り向く。
「映司、ヤミーだ。」
そう言って3枚の赤、黄、緑のメダルを取り出す。
「これも何か久しぶりだな。」
映司は呟きながらメダルを受け取り、走り出した。

「あんなヤミー居たっけ？」

映司がやってきた場所に居たのはサソリのような姿をしたヤミー。
「まぁ、いいや…」
そう言って映司は腰にオーズドライバーを装着。
そしてタカメダルを左手の指で上に弾き、それを右手でキャッチする。
タカメダルとバッタメダルをドライバーにセットし、続けてトラメダルをセットしそのままドライバーを傾ける。
そして右腰のオースキャナーを手に取り。
「変身…！」
その掛け声とともにオースキャナーでメダルをスキャンした。
『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ！　タトバ！　タ・ト・バ！』
いくつものメダルのエフェクト共に映司は”仮面ライダーオーズ”へと姿を変えた。
「オーズゥゥ！」
サソリヤミーはオーズの存在に気づき、襲い掛かる。
「悪いけど、一気に決めさせてもらうぞ。」
だがオーズはサソリヤミーの攻撃を軽く受け流し、トラクローで斬りつける。
そしてそのまま体をひねりバッタレッグで回し蹴りを決め、サソリヤミーを蹴り飛ばす。
起き上ったサソリヤミーは尻尾を伸ばして突き出してきたがタカの目で動きを見切りそれを回避する。
オーズは再びオースキャナーでメダルをスキャンする。
『スキャニングチャージ！』
バッタレッグが変形し、天高く跳躍する。
すると空中のオーズとサソリヤミーの間に赤、黄、緑の３つのリングが現れる。
オーズはドロップキックの体制をとり、サソリヤミーに向かって急加速。

赤い翼と黄色の爪のエフェクトが現れ、リングを潜っていく。
「セイヤァァァァァァァァ！」
オーズの必殺キック、”タトバキック”がサソリヤミーに命中し、サソリヤミーはメダルとなって爆散した。
「終わったか？」
アンクが遅れてやってくる。
「あぁ、でもサソリのヤミーなんて今までいなかったよな？」
言いながらアンクに歩み寄るオーズ。
「サソリ…？聞いたこともないな。」
だがその時、
「管理局です！そこから動かないでください！」
「え？」「あ？」
オーズとアンクが声のした方へと振り向くと杖を構えたツインテールの女性が居た。
「えーっと…何か？」
「今さっきここで爆発…が…え…？」
だが喋りながら声は小さくなっていき、杖は下がっていく。
そして…
「ユーノ君…？」
「あ？」
彼女とアンクの眼が合う。
さらに彼女の眼には一筋の涙が流れていた。
「え？あれ？さっきの…」
オーズはアンクと女性を見る。
するとアンクは目を閉じ右手の指を自分の頭に当てる。
「成程な…お前、こいつの仲間か？」
「ユーノ君をどうしたの！？」
再び杖を構えアンクに向ける。
「身体を借りてるだけだ。」
「アンク！とりあえずここはおとなしくした方がいいんじゃ。」

そう言いながら映司は変身を解除する。
「あ、さっきのひったくりの…」
女性の方は映司を見て驚く。
「君、名前は？俺は火野映司。」
「アンクだ。」
2人で名乗る映司とアンク。
「私は…高町なのは。」
「じゃあ、なのはちゃん、詳しい話はするからとりあえず杖はしまってくれる？」
その後、映司とアンクはなのはに管理局へ連れて行かれた。

第1話（前書き）

速くできたけど次は遅くなるかも…

第1話

「まぁ、遠慮せんで座ってな。」
茶髪の女性、八神はやてに取調室に案内される。
「えっとまずは…」
はやてはアンクを一瞥する、がアンクは相変わらずアイスを食べている。
「映司さんはなんでこのミッドチルダに来たか教えてくれへんかな？」
「俺達はメダルを追って来たんです。」
映司が答えるとアンクが右腕からタカメダルとタカのセルメダルを取り出す。
「メダルなぁ…」
はやては2枚のメダルを見つめる。
「その銀色の方がセルメダル、ヤミーやグリードの体を構成してて…」
「いや、ええよ、ヤミーとグリードの事はある程度解っとるからな。」
それを聞いて映司とアンクも少々驚く。
「実はなヤミーとグリードは少し前からこのミッドチルダに突然現れて暴れ出したんや。」
「それで私達は私達で色々調べてたんです。」
はやての言葉に続いて金髪の女性、フェイト・T・ハラオウンが取調室に入ってきた。
「その最中にユーノ君が行方不明になってな。」
はやてが再びアンクを見る。
「それで？返してもらいたいか？こいつを。」
「そうして貰いたいところだけど…出来ないんですよね？」
フェイトが映司を見ながら言う。

「うん、実はもうこの人の体は限界に近くて…」
映司が深刻な表情で語り出す。
「俺が離れたら…5分…いや3分ともたないだろうな。」
アンクは食べ終えてごみ箱にアイスの棒を投げ捨てる。
「仕方ないね…しばらくはこのまま、映司さんとアンクにヤミーとグリードとの戦いに協力してもらうって事に…」
「じゃあ…これからよろしくな。」
そういってはやてがアンクに右手を伸ばす。
がアンクはそれを無視して取調室を出て行ってしまった。
「あ…ごめん、あいつも根は悪い奴じゃないんだけどな。」
「ええよ、気にしてへんから。」
アンクの代わりに映司が頭を下げる。
「えっと、こんなこと言うのもなんだけど、管理局が調べたグリード達のデータって…」
顔を上げて映司がはやて達に尋ねる。
「それなんだけど、記録してた資料を全部盗られてて…すいません。」
フェイトが映司に謝る。
「そっかぁ…そう言えば、何でユーノ君の身体が限界だって解ったの？」
ふと疑問に思ったことをはやてに言ってみる映司。
そして返答は…
「う～ん、女の勘やな、私達はユーノ君の事はよく知っとるからなぁ。」
「？？」
映司には理解できなかった。
一方部屋の隅でフェイトは顔を少し赤らめていた。
取調室を出て行ったアンクはそのまま屋上に出て寝っ転がっていた。

「…？…！？」
しかし、突然起き上り服のポケットに手を突っ込む。
「無い…どっかで落としたか？」
そう言って屋上から階段を下りていく。
「あ…」
そこでなのはとばったり鉢合わせる。
「丁度いい、手伝え。」
「ふぇ？何？」
アンクはなのはの手を掴み一旦下の階に下りる。
「こいつの眼鏡をどっかに落とした。」
自分に指さしながらなのはにユーノの眼鏡を失くしたことを告げる。
「アンク…何でユーノ君の眼鏡を…？」
「失くしたことなら謝る。」
「え？あ、いやそうじゃなくて探してくれてるのが以外と言うか…その…」
素直にアンクが謝って来た事に若干戸惑うなのは。
「さっき失くしたのに気づいてからこいつ（ユーノ）が探せってうるさくてな。」
「そっか…ありがとう。」
笑みがこぼれるなのは。
「…さっさと探せ、誰かに踏みつぶされてもいいなら話は別だがな。」
アンクは眼鏡を探しに別の階へ早歩きで降りて行った。

「ヤミーとグリードの事は色々聞いたけど…」
「メダルで戦う戦士なんて初めて見ました。」
オレンジ髪のツインテールの少女、ティアナ・ランスターとその相棒スバル・ナカジマがオーズドライバーを興味津々に眺める。
「そんなにすごいかな…？」

「すごいですよ！なんかヒーローみたいです！」
なぜか目を輝かせて映司に迫るスバル。
スバルに詰め寄られて若干退く映司。
「そう言えば映司さん、アンクはどうやってユーノ先生と…？」
「それは解らないんだ、あいつは俺より先にこの世界に来て俺が来た時にはもう…」
全然教えてくれないし、と呟く映司。
「気にならないんですか？」
ティアナは気になるらしく映司に質問してくる。
「うん、まぁアンクはアンクなりに言いたくない理由があるんだろうし…。」
「何というか…」
スバルがぽつりと呟く。
「何？」
「映司さんってアンクの事、信頼してるんですね。」
「まぁね。」
少し照れくさそうに頬をかく映司だった。

「ありましたよー！」
赤毛の少年とピンク髪の少女、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエがユーノの眼鏡をフェイトのもとに持っていく。
あの後フェイト達も眼鏡探しを手伝ってくれたおかげで早く発見できた。
「ありがとう、後はアンクに…あ。」
フェイトが眼鏡を手に取るとそれを後ろから突然アンクが取り上げ、ポケットにしまう。
そしてアンクはすぐに何処かへ行こうとするが、
「ねぇ、アンク…」
「何だ？」

フェイトがアンクを呼びとめ、アンクは振り向かずにこたえる。
「アンクはユーノの頭の中を読み取れるんだよね？」
「まあな。」
アンクは背を向けたまま返答する。
「じゃあユーノは…私の…」
フェイトは言いかけてエリオとキャロの方を振り向き、ハッと我に返る。
「ごめん、何でもない。」
フェイトがそう言うとアンクは去って行った。
「フェイトさん…？」
「…」
キャロは不思議そうにフェイトを見つめ、エリオを真剣な表情で何かを考えていた。

「お前も苦労してるんだな…」
再び屋上に戻ってきて、貯水タンクの上に座っていたアンクはふと呟く。
「にゃはは…気づかれちゃった？」
すると物陰からなのはが現れる。
「お前も知りたいか？」
「うぅん、ユーノ君が元に戻ってからでいいよ。」
「だろうな…。」
するとアンクはタンクから飛び降りなのはの目の前に着地する。
「食うか？」
アンクはアイスキャンディーの2本取り出し、片方をなのはに渡す。
「えっと…いいの？」
「俺の口には合わん。」
そう言ってタンクに寄り掛かって座る。
なのはは渡されたアイスキャンディーを口に咥えると…

「む…これ何味？」
「抹茶コーラだとさ。」
「毒味？」
「あぁ。」
……
「ぷッ…」
思わず笑みがこぼれるなのは。
「何が可笑しい？」
「う～ん、なんだかユーノ君と一緒にいるみたいだなぁって。」
「…」
アンクは別のアイス（梨ミルク味）を食べだす、が一瞬表情が歪む。
「これとそのアイスどこで買ったの？」
「なんか変な感じの店だったね。」
「へ？あ…」
なのはが振り向くと映司が屋上に来ていた。
「アンクが他の味に挑戦してみたいって言うから買ったのに。」
「そうなんだ…。」
「俺だってアイスが冷たくて”うまい”ってのは解る、ただ今回は例外だったがな。」
「…？」
”うまい”の所だけ若干強調されてなのはは一瞬気になったがそれもすぐに忘れた。
その直後にヤミー出現のアラームが鳴り響いたからだ。

第1話（後書き）

抹茶コーラと梨ミルク　元ネタ解る人いるだろうか？
感想待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4857y/

オーズ&なのは　リリカル大戦2012

2011年11月17日20時59分発行